

令和3年度事業目標に対する主な取り組みと実績

一 事業部門の取り組み

1. 特別養護老人ホームしろみの取り組み

(1)入居者が望む生活が実現できるように、ICT(情報通信技術)を活用し、データ提供とフィードバックによるPDCAサイクルを推進し、ケアの質が向上する仕組みを構築します。

- ・ICTについては眠りスキャンを導入し、夜間の睡眠把握や転倒リスクがある方への適切な対応ができた。
- ・LIFEシステムに利用者のケアに関するデータ提供が十二分にできた。システム導入初年度であったことからフィードバックデータが少なく、改善効果の発現が不十分だった。

(2)介護職員の介護技術の向上並びに介護職員の腰痛対策を含む負担軽減やノーリフトケア（抱えない介護）に取り組みます。

- ・ノーリフトケアの啓蒙・研修を行い、福祉用具の正しい取り扱いが、利用者の怪我を防ぎ、職員の介護負担軽減に繋げることができた。
- ・介護技術の成果発表会(令和4年2月15日)を行い、ケア向上に取り組むことができた。

(3)看取り介護計画に沿ったケアの充実を図ります。

- ・入居者の状況の変化の都度ケアプランを見直し、他職種チームで利用者・家族の安心感を醸成することができた。

(4)各ユニットの取り組み

【草原ユニット】

①ユニットミーティングで決定したことは24時間シートに記載し、他職種含め、ケアの統一に努めます。

- ・決定事項をミーティング後に再確認し、ケアの統一に取り組むことができた。
- ・他ユニットへの情報共有は不十分だった。

②職員の腰痛予防のため、ユニット内で介助方法を見直し、負担が軽減できるようにします。

- ・ベッドからの移乗等においては、極カスライディングボードを使用し、介護負担軽減に努めた。

【あかねユニット】

①ユニットミーティングにて職員一人ひとりが課題をみつけ勉強会を行い、介護技術の向上・ケアの統一を目指します。

- ・内出血事故が多かったため、ケアの見直しを行い、機能訓練指導員と共にスライディングボードの使い方等の勉強会をし、内出血の減少に繋がった。

②24時間シートの見直し、アセスメントの取り方、24時間シート作成の仕方を勉強し、入居者・家族が望む生活が送れるよう取り組みます。

- ・24時間シートの見直しでは、ユニットミーティング前に各担当者に24時間シートのコピーを渡し、全員が見直し、内容について意見を出し合い、24時間シートの改善に取り組むことができた。

【山なみユニット】

①居室の清掃を行い、常に清潔な状態を心がける。

- ・床の清掃は気掛けて行き、清潔の保持と共に整理整頓に心がけ、事故防止に努めた。

②ケア記録の内容を充実させるよう心がける。

- ・すぐに記録が書けないことがあり、書き忘れや不十分なところがあった。
- ・「声かけ」という言葉で簡潔に記録してしまったことで、他のスタッフへ内容が伝わらないことがあった。

【こかげユニット】

①入居者・介護者ともに負担の少ない介護技術の向上(福祉用具を使用する)

- ・スライディングボードの使い方を定期的ミーティングで研修し、入居者・介護者ともに安全・安楽な方法を知ることができた。

②「より良く看取る」ための技術・心得の習慣とコミュニケーション能力を養う。

- ・体調の変化の気づきにチームで留意し、家族への連絡を適切にとることができ、最期の時間を家族に看取られながら逝かれた。
- ・本人、家族がコロナ禍の中でも絆を深めていけるよう、工夫・アイデアを現実には出せなかった。

【朝ぎりユニット】

①入居者一人ひとりが「その人らしく当たり前の生活」が送れるよう自立支援と自律支援の両立を図ります。

- ・「入居者のできることを一つでも増やしていこう」をスローガンに取り組みを始めた。入居者の笑顔や会話が増え、職員のモチベーションが上がった。

②介護福祉士として知識や介護技術を身につけ、自分の仕事の誇りやプライドを持ちます。

- ・毎月のユニットミーティングで研修の時間をつくり、担当者を決め、学ぶ場を設けたことで責任感を持って取り組むことができた。

2. 短期入所生活介護しよみの取り組み

(1)機能訓練、口腔、栄養の取り組みを連携・強化し、介護関連のデータ収集・活用とPDCAサイクルの推進を通じ、寝たきり防止等、重度化防止に取り組みます。

・担当介護支援専門員や他事業所と連携し、機能訓練、口腔、栄養の利用者情報を共有し、利用者の自立に向けたケアプランを提案した。PDCAサイクルを通じて、目標に対する利用者の意欲や職員のエビデンスに基づくケア、機能訓練の具体性が向上した。

(2)利用者の心身機能の維持回復、家族の介護の負担軽減を図るために、個々に応じた介護計画、24時間シートに基づいた個別ケアを提供します。

・利用者、家族からの日常生活情報とサービス利用中の情報を24時間シートに反映し、個別ケアの充実を図った。

(3)平均利用者数19名(年間平均稼働率95%)を目標とします。

・新規利用者にはPCR検査を行い、スムーズに利用ができるように努めた。病院のソーシャルワーカーや介護支援専門員と利用者が円滑に利用できるように空床情報の提供等を実施し連携向上を図った。

結果、平均稼働率は83.2%であった。

3. デイサービスセンターしよみの取り組み

(1)データベース「LIFE」(高齢者の状態、ケア内容の情報)へのデータ提供とフィードバックによるPDCAサイクルを推進し、ケアの質が向上する仕組みを構築します。

・LIFEのデータ提供を行い、利用者のADL状況等を可視化することができた。現時点でフィードバック数が暫定的であることから、個々の利用者に対して科学的介護を行えるまでには至っていないが、データの分析・解釈によるケア改善の足掛かりができた。

(2)利用者の要介護度改善6名以上を目指します。

・介護度改善者は4名であった。機能訓練により、運動器全般による歩行、立ち座り動作、痛みが改善した。

(3)平均利用者数21名(年間平均稼働率80%)を目標とします。

・新型コロナウイルス感染症対応のなか居宅支援事業所、包括支援センター、病院へ可能な限り営業活動を行ったが平均稼働率は76.0%であった。次年度に向けて活動内容のPR等の強化を図っていく。

4. デイサービスセンターしよみ ほほえみの取り組み

(1)利用者の認知症の症状(中核症状、行動心理症状)等、介護関連のデータの収集・活用とPDCAサイクルを推進し、行動心理症状が軽減するケアを提供します。

・利用者の認知症状を職員間で情報共有し、LIFEで既往歴、ADL等の可視化に努めた。また、認知症の知識を深めるために部門会議内で勉強会を行った。

(2)利用者の要介護度改善2名以上を目指します。

・利用者1名の要介護度が改善した。

(3)平均利用者数8名(年間平均稼働率68%)を目標とします。

・平均利用者数8.5名(年間平均稼働率71.0%)と目標を達成した。今後も、新規利用者がスムーズに利用できるように、担当介護支援専門員との綿密な連携に努める。

5. ケアプランセンターしよみ

(1)住み慣れた地域において、利用者の意向を尊重した包括的サービスが提供できるチーム作り(サロン立ち上げへの参画・語らん場への参加等)を行います。

・新型コロナウイルス感染防止のため、「語らんば」等の会合が見送られ、活発な連携をとることができなかった。

(2)入退院時の医療連携と定期受診の同行等、日常的な連携を行い病状の悪化を早期に発見できるように努めます。

・利用者が入院された時には、3日以内に病院に情報提供を行う等の連携を図った。また、利用者の病院受診に同行し、主治医と連携を図ることができた。

(3)月平均利用者90名(年間稼働率85%)を目標とし、利用者増に向けて取り組みます。

・新型コロナウイルス感染症の影響の中、可能な限り関係機関へ足を運び、目標の近い月平均利用者87名、年間稼働率83.3%だった。

6. グループホーム華の苑

(1)24時間シートに基づいたケアを提供し、利用者の自律した生活を目指します。

・24時間シート部員や居室担当者を中心に利用者9名の24時間シートの作成を行った。

・見直しや更新方法について、職員間での共有不足により統一出来ておらず、24時間シートの活用が不十分であった。

(2)利用者の状態観察等の情報をケース記録に記し、引継ぎを確実にし異常の早期発見・対応に努めリスクマネジメントの強化を図ります。

・ケース記録の記入方法や申し送りについて見直しを行ったことで、職員間の情報共有が高まり、適切な対応や医療機関との連携に繋げることができた。

(3)地域行事や外出を積極的に取り入れ、地域社会とのつながりを深めます。

- ・新型コロナウイルス感染防止のため、昨年度まで参加していた様々な地域行事が中止となった。
- ・苑内で過ごすことが多かった利用者に、少しでも季節を感じながら楽しく過ごしていただけるよう、職員が毎月様々な行事を立案し、実施することができた。

7. 放課後等デイサービス(みらい学童しるみ)

(1)併設の高齢利用者との交流を通して成功体験を重ね共生社会をサポートします。

- ・感染予防を行いながら、敬老の日には手作り壁画の贈り物や餅つき等を通して高齢利用者との交流を行うことができた。

(2)障がい児童・家族・関係機関等と協働し、個別支援計画に沿ったチームケアを実践します。

- ・毎月児童支援会議を開き、個別支援計画に沿った支援の振り返りを行い、チームケアの必要性を学び、ケアにむすびつけることができた。

(3)平均利用者数9名(年間平均稼働率90%)を目標とします。

- ・利用児童の保護者の口コミや市役所での相談支援事業所の会議に出席し、ピーアールを行った。目標達成には至らなかったが、開設直後から年間を通して月平均利用者8.0名、年間稼働率80.0%だった。

8. 職種別の取り組み

(1)看護職員

ア)多職種との報告・連絡・相談・確認を密にするとともに、看護職員間の連携を強化し、利用者の変化や異常を早期に発見し、安定した体調管理に努めます。

イ)看取り期における本人、家族との十分な話し合いや関係者との連携の充実に努めます。

- ・体調の変化を他職種からの報告で早期に対応したことで、より安定した体調管理ができた。
- ・家族が最期まで経口からの摂取を望まれ、その意向に他職種が協働し、希望に添うことができた。
- ・コロナ禍により看取り期の面会の制限や緩和、死亡後の家族対応等がその都度変わったが、不測の事態を招かないよう職員間で情報共有を図った。

(2)歯科衛生士

歯科医師や多職種と協力し、利用者の状態に応じた口腔衛生管理に努めます。

- ・目標や課題の重要度について他職種で話し合う機会を設け、ユニット職員とチームで口腔ケアに取り組むことができた。
- ・栄養・機能訓練と口腔維持機能訓練加算での連携を図り、入居者への経口維持に努めることができた。

(3)生活相談員・介護支援専門員

地域の相談窓口として、家族の悩みに対する傾聴力を高め、北諫早中学校区(8町自治会)を中心に積極的関わりを行います。

- ・地域の方々からの相談があった際には、その人の立場に立ち話をしっかり聞くことができた。
- ・コロナ禍により、北諫早中学校区自治会との関わりは薄かった。

(4)機能訓練指導員

・特養部担当

入居者の自立支援の促進を目指し、入居者のできる動作、最小限の介助量、福祉用具の選定等を多職種と情報共有し、生活の維持に努めます。

- ・カンファレンスに参加し、問題点に対する検討に努め、他職種との情報共有ができた。
- ・ノーリフトケアの話し合いや福祉用具の選定を通して、福祉用具への感じ・知識を深めることができた。

・居宅支援部担当

ア)サービス担当者会議へ参加し、状況報告や専門的なアドバイスをを行います。

イ)3ヶ月に一度自宅訪問・評価を実施し、自宅での過ごし方、環境を踏まえ、生活環境に合わせた機能訓練の実施に努めます。

- ・サービス利用中だけでなく、自宅でできる動作が増えるよう計画、実践した。また、利用者だけではなく家族の介護力も評価し、介護負担軽減につながるプログラム、動作指導を行うことができた。

(5)栄養管理職員

1)管理栄養士

施設・在宅サービスご利用者の体調や身体状況について多職種と情報共有し、改善すべき課題を明確にして栄養ケアマネジメントの充実に努めます。

2)調理職員・栄養職員

食事における個別ケアを実現していくためユニットでの盛り付けに携わり、残菜量データの分析を行い、献立作成に反映しながら個人の嗜好にあった食事提供ができるよう努めます。

- ・調理職員がユニットでの盛り付けに携わることで、利用者や他職種の声を聴くことができ、調理方法・切り方を変更するなどして残菜の原因を追究し残菜量の減少につなげることができた。
- ・リスク判定の変化、体調不良による計画書の変更など、個人の課題について計画書作成を行った。
- ・咀嚼・嚥下に課題がある利用者に対して、他職種と情報共有、ケアの見直しを行い、経口維持計画の算定を

行うことができた。

(6)事務職員

ア)各事業部門のICT(情報通信技術)導入効果を評価し業務改善に努めます。

イ)利用者・家族へより良いサービスを提供するため、現場職員に的確な情報伝達や情報共有を行い、事務業務の適正・効率化に努めます。

- ・介護ソフトをクイックケアへ変更した4月から電子媒体で利用者の記録や実績を残せることができた。
- ・窓口対応について、接触による感染リスクを減らすため、特養の利用料金を現金支払いから口座振替への変更を推奨した。

(7)環境整備職員

ア)居室や周囲の環境を清潔に整え、安全で快適な暮らしが継続できるように努めます。

イ)利用者・家族が花や緑に彩られた景観を楽しむことで、癒しや楽しさをもらすことができる庭園作りに努めます。

- ・特養の朝食・昼食後の食器洗い・シーツ交換・清掃を役割分担し、環境整備職員会議で確認を行う等し、確実にを行うことができた。
- ・四季を通して色とりどりの花を庭園へ植樹し、利用者や地域の方々に季節感を味わっていただくことができた。

(8)運転職員

ア)運行前の車両点検を行い、「ご利用者送迎運転マニュアル」に沿った安心・安全な運転に努めます。

イ)年間を通して施設内外の設備、整備を計画的に行い、利用者や職員が過ごしやすい施設づくりに努めます。

- ・送迎前の車両点検や整備、安全運転に努め、安全・安心な送迎を行った。また、感染防止のため、送迎後の車内清掃を行った。
- ・利用者の心身状態把握と情報共有に努め、利用者・家族に対し笑顔で挨拶を行うことができた。

9. 家族懇談会の実施

- ・新型コロナウイルス感染防止のため、実施できなかった。

10. 職員教育

(1)新任職員については、年間計画に基づき、採用時に法人理念・施設の方針等について研修を行った。

(2)令和3年4月採用新任職員から新卒者を対象として「介護保険について」「ビジネスマナー」についての研修を毎月行った。

(3)外部講師を招いての各種研修は、あきやま病院の医師に出席していただき、認知症について事例検討を2回行った。

(4)施設内研修については、密になる集合研修を避けたため、新たな取り組みとして動画を活用した研修を行った。

二 地域との親睦・交流及び地域福祉の向上

地域包括ケアシステムの実現に向けて、日常生活圏域(北諫早中学校区)内の子どもから高齢者、障がいの方々との交流・活動、共生社会の実現に向けて、新型コロナウイルス感染症の影響の中、下記内容を実践した。

(1)新規事業として令和3年1月4日より、障がい児通所事業(放課後等デイサービス)、「みらい学童しろみ」を開設。令和3年度より小学1年生から高校1年生の障がいを持った児童との新たな交流・支援を行った。

(2)地域住民に施設の開放・場所の提供として、城見町班会議等の際に使用してもらった。

(3)近隣のみやまこども園や鎮西学院大学、就労支援施設等との交流・体験実習を可能な限りに受入れ、指導や助言技術、共生の必要性を再認識することができた。

三 介護報酬の動向

1. 特別養護老人ホームしろみ

(1)介護報酬は前年度の約25,721万円から約26,023万円へ、約302万円増加した。また、稼働率は前年度の98.6%から98.3%へ減少した。

(2)長期入院へと繋がらないよう入院先の病院や家族との連携強化に努め、短期間の入院で施設への再受入を行うことができた。

(3)収入の要因は、看取り介護者への適切な加算算定やLIFE導入による他職種協働との計画的な加算算定ができたことによるもの。

2. 短期入所生活介護しろみ

(1)介護報酬は前年度の約8,441万円から約8,358万円へ、約83万円減少した。収入減の要因は平均介護度の低下によるもの。稼働率は前年度の81.6%から83.2%へ増加した。

(2)コロナ禍により、積極的な営業活動ができなかった。他事業所の情報提供等に努めたが、目標達成に至らなかった。

3. デイサービスセンターしろみ

- (1)介護報酬は前年度の約5,454万円から約5,156万円へ、約298万円減少した。また、稼働率は前年度の80.0%から76.0%へ減少した。
- (2)コロナ禍により、積極的な営業活動ができなかった。他事業所の情報提供等に努めたが、目標達成に至らなかった。

4. デイサービスセンターしろみ ほほえみ

- (1)介護報酬は前年度の約2,679万円から約3,057万円へ、約378万円増加した。また、稼働率は前年度の63.0%から71.0%へ増加した。
- (2)新規利用者がスムーズに利用できるように、担当介護支援専門員との綿密な連携に努め、現利用者には適切な利用回数を提案し、利用者・家族に利用増を勧めた。

5. ケアプランセンターしろみ

- (1)介護報酬は前年度の約1,422万円から約1,398万円へ、約24万円減少した。また、稼働率は前年度の82.6%から79.0%へ減少した。
- (2)地域包括支援センター・他事業者との連携に努めたが、目標達成に至らなかった。

6. グループホーム華の苑

- (1)介護報酬は前年度の約3,879万円から約3,986万円へ約107万円増加した。増収の要因は、上位の加算算定ができたことによるもの。また稼働率は前年度の96.5%から96.1%へ減少、平均介護度は3.0から2.9と若干減となった。

7. みらい学童しろみ

- (1)介護報酬は前年度の約65万円から約2,704万円へ約2,639万円増収した。また稼働率は前年度の12.5%から80.0%へ増加した。
- (2)新年度4月から新1年生14名等、前年度(令和2年1月開設～)実人員4名から19名へ増加した。